

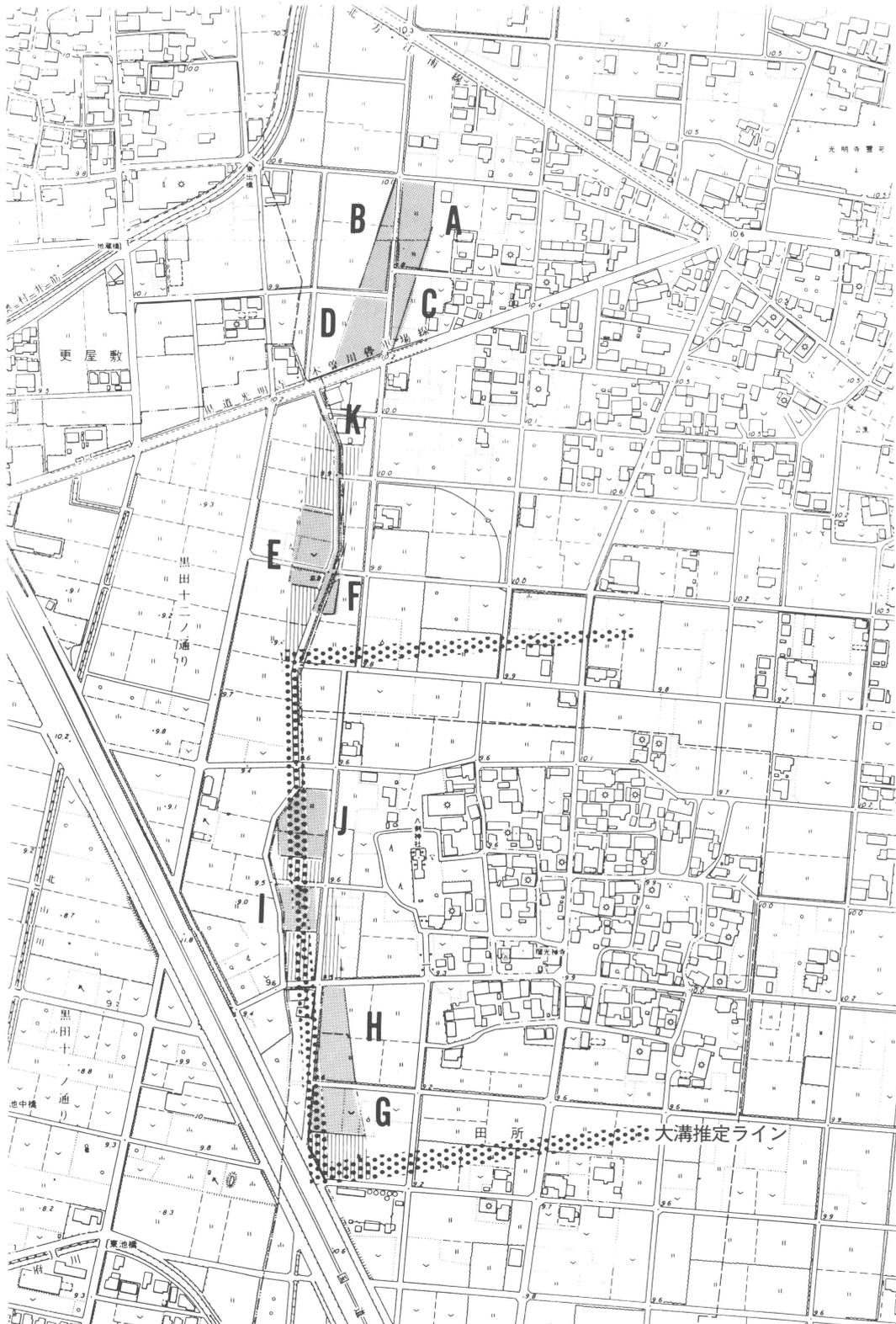
田 所 遺 跡

調査の経過 一宮市大字田所と隣接する葉栗郡木曾川町黒田にまたがる田所遺跡は木曾川によって形成された自然堤防及び後背湿地上に位置している。現況は標高10m前後の水田及び畑地である。東海北陸自動車道の建設にともなう事前調査を、日本道路公団及び愛知県土木部から愛知県教育委員会をとおして委託を受け昨年度より実施している。今年4月から県道光明寺木曾川停車場線の北側にA～D区を設定し、10月まで調査を行った。また、それと並行して92F・92G区に隣接する南側にE・F区を設定し7月まで調査を行った。それに引き続き、遺跡の南限92H区から北へむかう地点のG～J区の調査を3月まで実施した。その間、11月中旬から12月にかけて92E～G区周辺の道路部分K区の調査を実施し、今年度の調査面積は14,759㎡に及んだ。

調査の概要 今年度は田所遺跡の北限から南限まで調査が及び、田所遺跡の発掘予定地内の全容がほぼ解明されてきた。昨年度の調査で県道光明寺木曾川停車場線南で墳墓堂を中心とする墓域の遺構が検出されるとともに、旧集落を囲むと推定される大溝など中世の遺構が検出された。また、古代の住居跡、古墳時代後期の水田も検出された。昨年度及び今年度の調査をふまえると、田所遺跡はⅠ：弥生時代中期、Ⅱ：古墳時代前期、Ⅲ：古墳時代後期、Ⅳ：奈良時代、Ⅴ：平安時代、Ⅵ：中世と大きく6期にわけて考えることができる。今年度の調査で県道光明寺木曾川停車場線の北のA～D区において、Ⅱ期を中心とする遺構群が検出され、従来の田所遺跡とは遺跡の性格を異にすることがわかってきた。（太田芳巳）



田所遺跡全景



第1図 調査区位置図 (1 : 5000)

A～D区の概要 本調査区の基本層序は、第1層：耕作土、第2層：床土、第3層：褐色土、第4層：黒色砂質土、第5層は基盤層である砂層（又はシルト層）となる。本調査区の中心時期となるII期の遺構は、第4層の上面（II-b）と下面（II-a）で確認できた。II期の遺物・遺構は共に最も充実しており、ここでは便宜上、田所遺跡の一部として報告するが、従来呼称されてきた田所遺跡とはその性格を異にすることは明白となった。遺跡の景観は、A区からD区にかけて東北-南西方向に幅1m程の溝（SD10）が延び、その北側に土坑等が展開しており、さらに、A区の北西からB区の北にかけて当時の自然流路が北から南に流れている。すなわち調査区は、川辺に沿う遺跡の西端部と考えられる。SD10以南ではII期の遺構・遺物は希薄となるが、逆にIII期の遺構・遺物は多く認められる。V期以降の遺構としては、調査区の中央部及び西側で南北方向の溝を確認できたに留まる。

A～B区の遺構 I期に属する遺構としては、2基の土坑を確認した。

II期が本遺跡の主要な時期である。この時期の遺構は、調査区の北西をかすめる自然流路と、C区とD区を北東から南西にかけて掘削されているSD10との間に、濃密に分布する。特徴的なのは2つの土坑群である。特に注目されるのは、SK58をはじめとする一群で、いずれも直径約250cm、深さ約80cmと大型で、自然流路に平行して並んでいる。この土坑群は水辺の祭祀に関わる遺構であろうと思われる。その根拠は、①遺物の出土状況、②土坑の規則的な配置、③調査区内で住居跡が検出されていないこと、④自然流路の水際という立地条件などである。さらにはSK58に隣接するSD28は、祭祀に使われた建物の周溝とも予想される。SK18とSK29などを中心とする土坑群は、この大型土坑群に付随するものであろう。

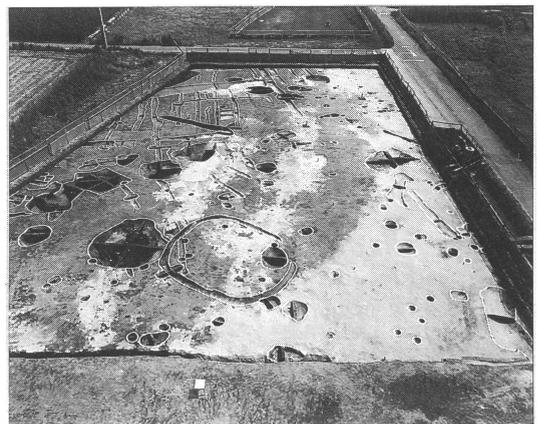
IV・V期の遺構は、SD10以南に集中する傾向が見られる。須恵器を含むこれらの溝と土坑は少数であり、この時期の本遺跡は衰退化傾向にあると言えよう。

VI期の遺構は、調査区南部を中心に、溝数条が検出されているにすぎず、むしろこれらの遺構は、本調査区との関わりよりも、南に展開している「墳墓堂」に関連するものと考えられる。

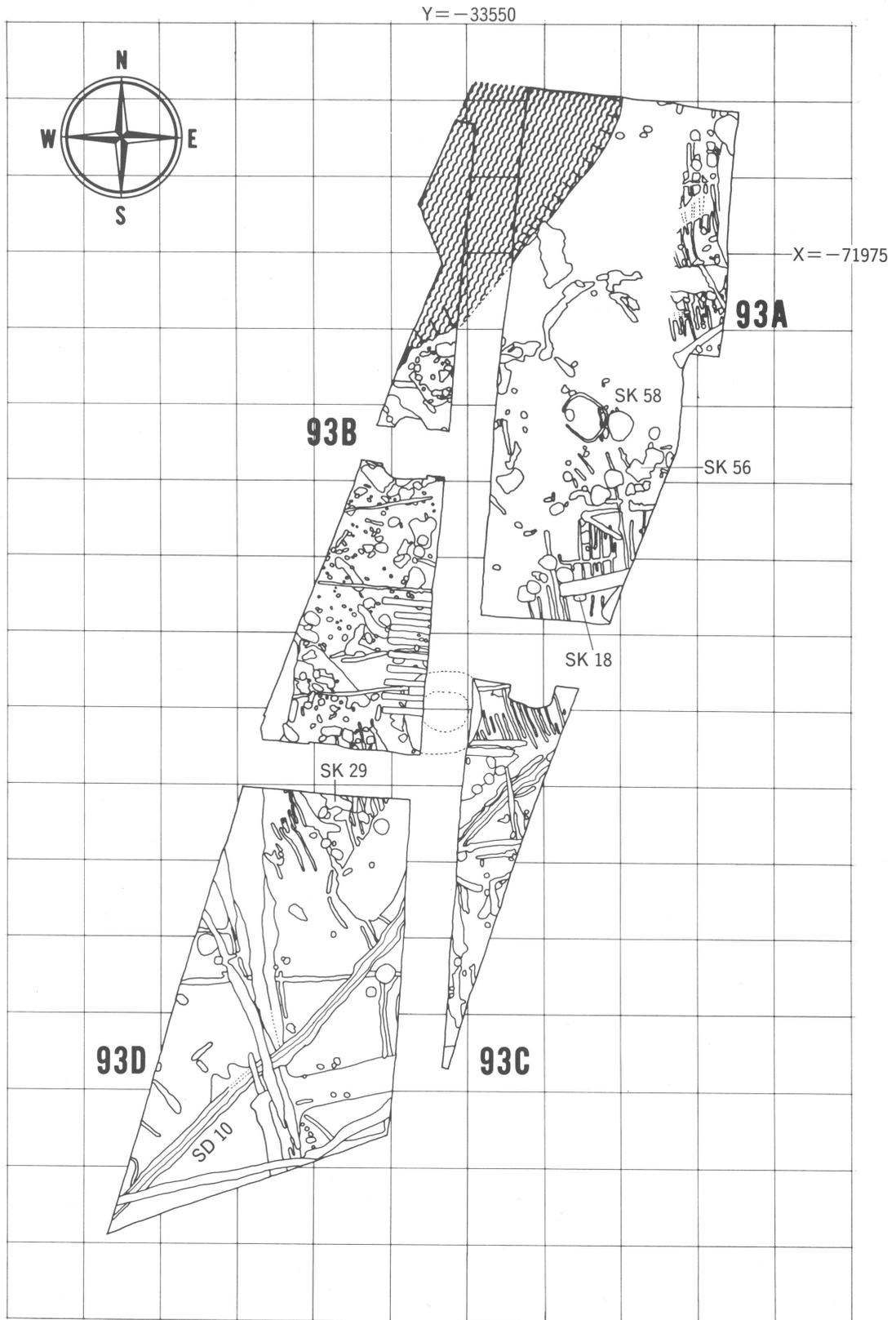
（西原正佳）



C区の全景（北東から）



A区南半分の全景（北から）



第2図 遺構全体図 (1/800)

A-D区の遺物 ここでは、本遺跡の中心をなすII期と若干III期に属する出土遺物について述べてみる。

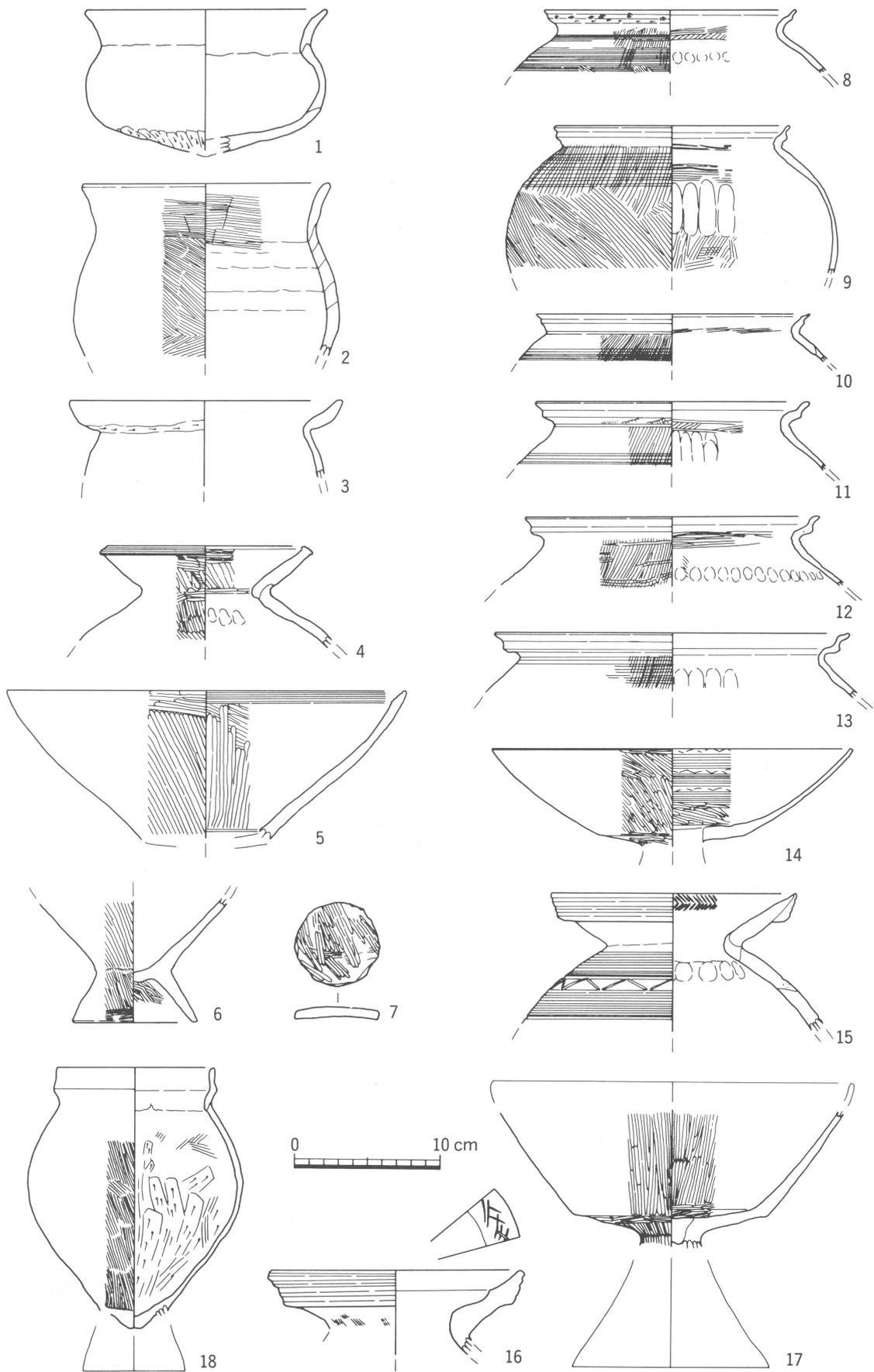
II期に属する遺物は、多くの土坑および溝から出土しており、特に土坑のありかたは、本遺跡の本質的な解明にも関わってくるため、ここでは3基の土坑（SK18・56・19）を例にとり出土遺物を概観する。SK18の遺物は、壺・甕・高杯・鉢・円盤状土製品の構成であり、煮沸具としてのS字甕とパレス型壺を欠いている点を特徴としている。壺（4）は外方に短く外反し、口唇部をわずかに拡張してここに4条の沈線を施している。体部はヘラミガキによる整形である。甕は脚台を持つタイプで占められるが、口頸部の形態により（2）のように緩く外反する口縁部を持ち、体部には球形を示さずむしろ長胴化してハケ調整が施されたタイプと、（3）のように受け口気味に短く下方に肥厚させた口縁部形態を示すタイプとがある。体部は未調整に近いナデ調整のままで終わっている。（6）はこの時期にみられる一般的なタイプである。（1）は強く外反する口縁部に偏平な体部がつく。器面はナデ調整である。底部を欠くものの、ヘラケズリ調整によって突出させていると思われる。口縁部と体部下半にススの付着が認められる。（5）は、内彎の杯部を示し、口唇部は内側に面取りして沈線を4条施している。こうした、高杯の内面に加飾（高杯に限定されない）する傾向は、尾張北部から美濃西部に広く認められ、ひとつの地域性と考えられる。（7）は壺の体部破片による二次加工製品である。SK56はA区の中央部で検出され、列をなす4基の大型土坑のひとつである。土坑の底から（14・15）が出土し、他は埋土中の遺物である。出土土器群の特徴は、煮沸具がS字甕によって占められていること、貯蔵具としてパレス型壺のみが出土していることにある。SK18と対照的な様相は、その遺構の性格の違いに起因するものと考えられる。（8～13）のS字甕には、口縁形態と内外面の調整の違いによって時期差が認められる。（8・9・10）は口唇部が短く上方にたちあがり、頸部内面の荒いハケ調整、肩部の横線に共通点を持つが、（8）は口縁の屈曲部に刺突文がめぐらされている点で（9・10）より古い様相となる。体部は球形を呈す。（11～13）は、口縁屈曲部から外方に強く外反している。これは、口縁部成形時の強いナデ調整によるものと考えられる。その結果刺突文が無くなっている。また、頸部にヘラによる沈線を巡らしている傾向が認められる。（13）は、口縁形態や頸部内面ヨコハケ消失の点で後出的な様



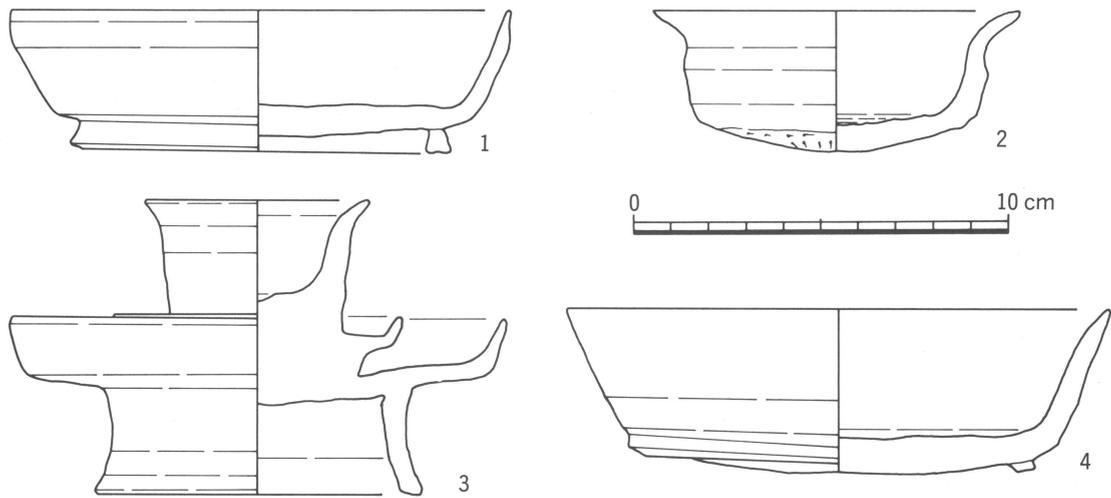
C区S D 10上面遺物出土状況（北から）



D区S K 29（奥）遺物出土状況



第3図 出土遺物実測図II期 S K 18 (1-7) S K 56 (8-17) S K 29 (18) S=1/4



第4図 出土遺物実測図 (S=1/2) 1. 2 検出 3. 4 遺構

相を示すが、頸部外面に依然として沈線を残している。(14)は杯部下部に弱い稜を持ち、杯部が大きく広がる。杯部内面にヘラ状工具による鋸歯文と沈線を3段に配している。胎土・焼成共に良好である。パレス型壺である(15)は、口唇部を下方に肥厚させ3条の凹線文を施している。内面にはヘラによる羽状文を配している。体部上半にクシ描横線とヘラによる鋸歯文を相互に配している。また、口頸部の外面と内面(文様帯を除く)に丹彩を塗布している。(16)も同様な壺であるが、口縁内面に稜を持つ点で異なる。(17)の高杯は、杯部下部に稜を持ち上方に大きく開く杯部形態を示す。(14)の高杯よりは古い様相を示している。(18)は、SK29から出土した。口縁部で屈曲し受口状に立ち上がる形態を持つ台付甕である。体部外面はハケ調整・内面はヘラケズリ調整であり、口頸部は内外面共にナデ調整である。口縁形態からすれば外来的様相が窺われる。以上の出土土器は当地域の土器編年上、概ね廻間I・II式に該当すると思われる。土器以外の出土遺物として、打製石鏃4点(チャート1点、他はガラス質石英安山岩：I期)と膝柄鍬1点：II期-a(SK58出土)がある。

III期の遺物は検出面及び遺構から若干出土している。概ね7世紀から8世紀代に比定できる。有台杯身(1・4)は腰に明瞭な稜を持たず、低い台が付く。(1)は口縁端部で立ち上がる特徴を持つ。8世紀後半に比定できる。(2)は底部付近を手持ちによるヘラケズリ、口縁を外半させる椀である。7世紀代に比定。(3)は特殊な形態を呈した燭台ふうの造りで、白色系陶器と思われる。

(高橋信明)

E F K区 E・F・K区は、昨年度調査した92E・F・G区と隣接する調査区であり、昨年度確認された墳墓堂を中心とする中世の墓域との関連を確認することが調査の第1目標であった。その結果中世の墓域との関連が認められたのは、E区の北部（Eb区）とK区であり、E区の南部（Ea区）とF区では墓域との明確な関連については認めることができなかった。

Ea区・F区では、遺構については中世・近世の水田、溝、土坑などが確認されたものの、ほとんど遺物を伴っておらず、若干の灰釉系陶器が出土する程度であった。また、下層の遺構が展開することは認められなかった。しかし、弥生時代の石鏃や古墳時代の須恵器が出土しており、本調査区の周辺に弥生時代～古墳時代の遺構が存在している可能性は十分に考えられる。

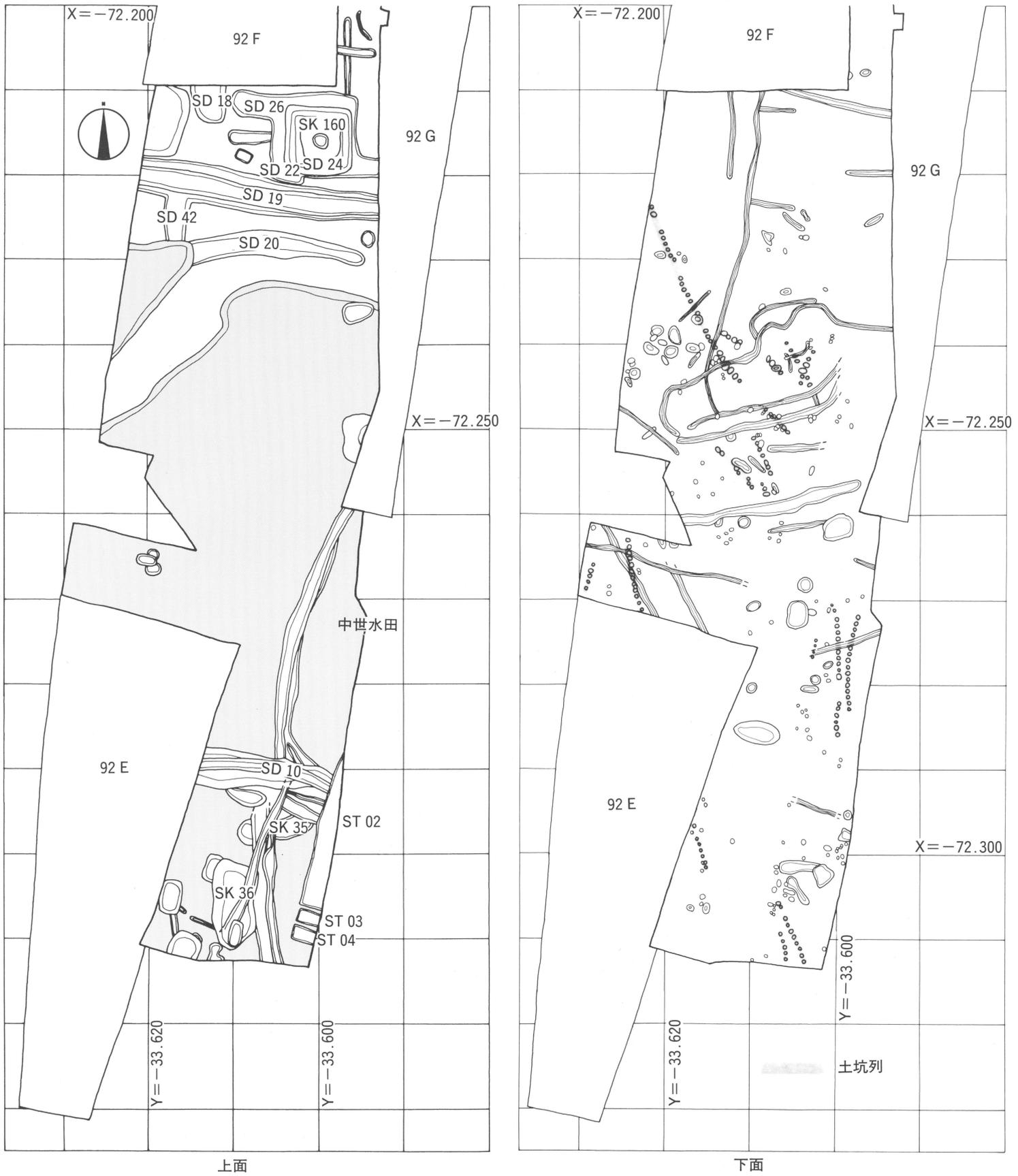
墳墓堂関係 昨年度の調査結果に加えて、墳墓堂を中心とする中世の墓域について以下のことが新しく確認された。

まず、中世の墓域の範囲のうち南限を示すと考えられる2条の溝（SD19・20）を確認した。SD19は溝幅約2m・深さ0.8mであり断面が2段となっている。SD20は溝幅約1.5m・深さ0.5mであり、断面がU字型となっている。これらの溝が中世の墓域の南限と考えられる根拠は次の2点である。すなわち92F区で確認した墳墓堂へと通ずる道を構成している溝（92Gb区SD58）が、SD19・20の近辺で終了していること、さらに、E・K区ではSD19・20の南側で中世の墓域に関連する遺構・遺物がほとんど検出されず、墓域を構成する遺構の大部分がこれらの溝の北側部分に集中していること、この2点によりSD19・20は墓域の南限を示していると思われる。また、北限については明確に確認できなかった。墓域の北方に位置する93A～D区では、確実な遺構は確認されず、またその出土遺物からも、その関連性は薄いと考えられる。このことからおそらく、K区のやや北部に北限を画する遺構が存在するものと推測される。

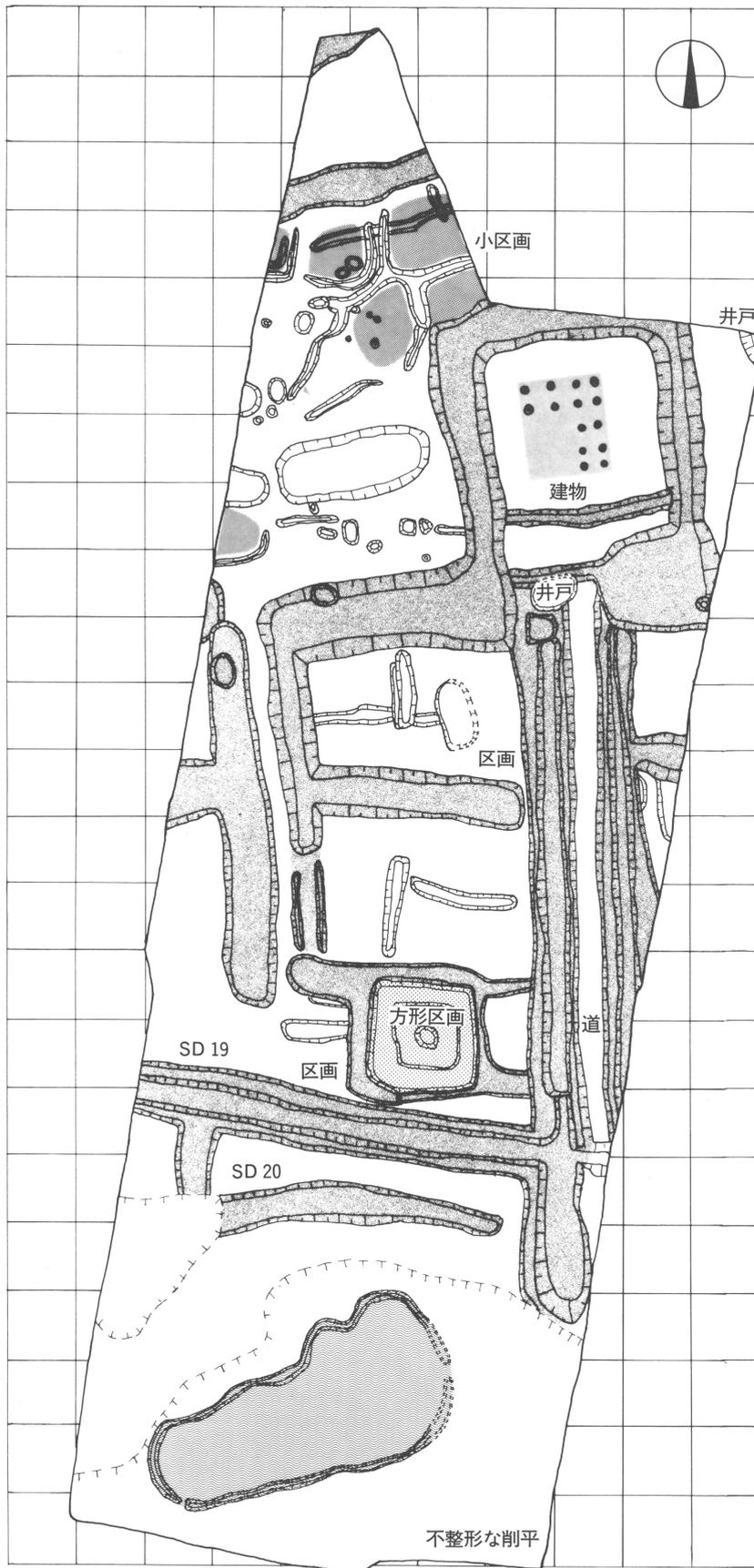
次に、E・K区の墳墓堂の南西部において周溝を巡らせた方形区画を確認した。台状部の規模は5×5m、溝は幅1m・深さ0.8mで断面がV字型となっている。さらに、台状部の中央で直径1mほどの土坑が検出され、この土坑から土師質皿が1点出土している。この遺構は墓域の内部に位置していること、及びその形状から中世期の塚墓と思われる。しかし、墳墓堂との関連については今後の課題である。

さらに、92G区で確認された墳墓堂を取り囲む周溝の西側部分を確認した。溝幅約3m・深さ0.8mで断面はV字型となっている。出土遺物は昨年度と同様に13～14世紀の灰釉系陶器が中心であり、溝の北側より下駄が1揃出土している点は興味深い。また、昨年度の調査に引き続きこの周溝が墓域の区画溝と接続することが確認された。

最後に墓域の南部についてであるが、Eb区南半において黒色土が大きく不整形に削平され、その周囲を楕円状に走る溝が確認された。この溝の持つ意味は現時点では確認できないが、墳墓堂を中心とする中世の墓域と何らかの関連性があるものと思われる。今後の調査・研究によって墓域のとの関連について考察していく必要がある。 （牧 謙治）



第5図 EF K区遺構図 (1/600)



第6図 墳墓堂関連遺構図 (1/500)

G～J区 G～J区は、田所遺跡の南部にあたる。昨年度はこの地区で4調査区の調査を行い、今年度はこれに隣接する部分に4調査区を設定した。これまでの調査によって、古墳時代の水田跡、奈良時代と平安時代の堅穴住居跡、中世の大溝などが確認されている。

基本層序はH・G区では現表土下から明褐色粗細砂層、黒褐色土層となり、基盤に至る。I・J区では現表土下に明黄白色粗砂と灰褐色シルトからなる不安定な層が存在し、黒褐色土層を挟んで基盤となる。この地区の遺構の基盤は灰白色シルト層あるいは細砂層である。H・G区では明褐色粗細砂層の上面で奈良時代から中世にかけての遺構を検出し、この砂層内および古墳時代の水田耕土である黒褐色土層の上面で古墳時代の遺構を検出した。I・J区では黒褐色土層上面で遺構検出を行った。G区からJ区南部にかけては基盤はほぼ水平の堆積であり、J区以北及びG～J区の調査区の西面に対して微高地となっている。J区北部で基盤は緩やかに高度を下げ、湿地性の堆積土が厚く堆積する。

今年度の調査ではⅢ．古墳時代後期 Ⅳ．奈良時代 Ⅴ．平安時代 Ⅵ．中世前半の4時期の遺構が検出された。

Ⅲ期の遺構としては、水田の畦畔及び耕作土が検出された。G・H区においてH区北端からG区中央部にかけて北に向かってわずかに西に振れつつほぼ南北に一直線に延びる大畦畔と、H区の中央部でこれに直交してほぼ東に向かう大畦畔が確認された。大畦畔は典型的な部分で幅約1.8m、耕作土面からの高さ約0.3mで、明黄褐色シルトを盛ったものである。その上端部は、上層の砂層上面で検出できる部分もある。H区北半ではその後の削平によって遺存状況は悪く、またG区南半では確認できなかったが、大畦畔は南北方向及び東方向にさらに延びるものと考えられる。H区では大畦畔内を区画する小畦畔が検出された。確認できた部分では、大畦畔に対して角度が若干振れながらそれに沿う形で大畦畔による区画を矩形に分割している。幅は0.4m前後、高さは0.2m以下である。大畦畔と同じく明黄褐色シルトを盛っている。この水田遺構の耕作土と考えられる黒褐色系の粘土層がG区からH区南半にかけて明褐色粗細砂層下にほぼ水平に堆積している。厚い部分で20cmで、大部分は10cm前後の層であり、H区北半では消失している部分もあるがI区まで安定して広がっている。

Ⅳ期のみには属する遺構は確定できなかった。I区のST01はこの時期からⅤ期の初頭の時期に属するものと考えられる。検出面より0.2～0.3mで水田底面に達し、埋土は黄褐色粘土である。

Ⅴ期の遺構としては、堅穴住居跡、溝、土坑などが検出された。堅穴住居跡は、H区とG区の北端部でそれぞれ5棟と3棟が切り合っており、またH区南部で1棟のみ切り合いなく確認された。これらは、明褐色粗細砂層の上面で検出されたが、H区SB06以外は遺存状況が悪く、床面に近い部分のみを確認した。これから平安時代初頭の灰釉陶器、須恵器、土師器（第7図）が出土した。また、G区北端部からH区南端部にかけて同時期の土坑十数基が検出された。H区北半部の中世水田遺構の下面で平安時代前半の溝2条が検出された。いずれも幅5～8m、深さ約0.6mで、1条は東西方向に走り、他方は南西から北東に延び、

北東端で合流する。性格は不明である。

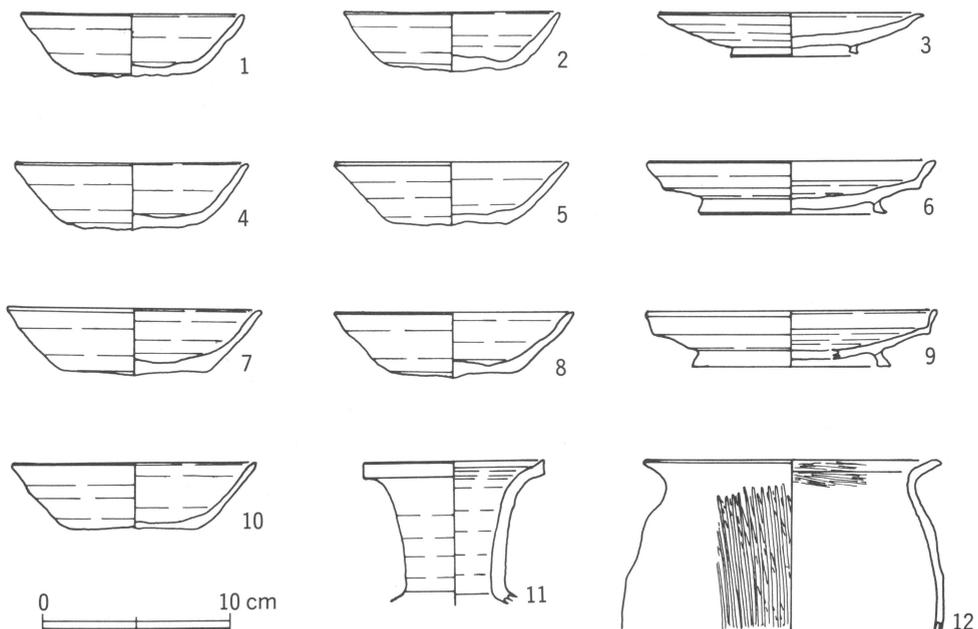
Ⅳ期の遺構としては、溝、井戸、土坑、水田などが検出された。H・I・J区において、確認できる部分で幅最大約8m、残存部の深さ最大約1.5mの大溝（Ⅰ区SD03）が確認された。南北方向に直線状に延び、先年度の調査から集落の外郭をなすと考えられる溝である。埋土は明黄白色粗砂で、強い流水による堆積が認められる。G区で、この時期の土坑、井戸、小溝などが集中して検出された。井戸は1基重複して5基検出され、そのうち4基に曲物および木組などの構造物が遺存した。溝は十数条検出され、いずれも東西方向、あるいは南北方向をとる。SD02からは比較的多量の灰釉系陶器が出土した。また、百数十基の小土坑が検出されたが、掘立柱建物などは確認されなかった。この時期の水田の耕作土層は現水田面下に連続して堆積し、Ⅰ・Ⅱ区では全面に広がり、H区では明褐色砂層と黒褐色土層を掘り込んで調査区の中央から北部に広がっている。（酒井俊彦）



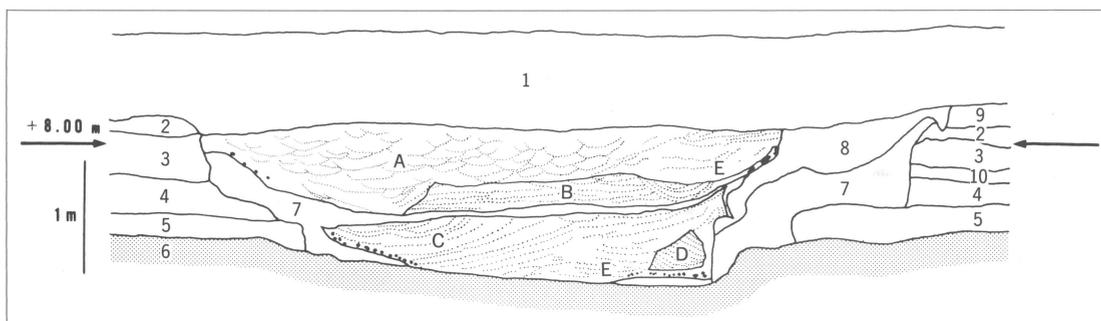
G区 SE02



Ⅰ区 SD03 (大溝)

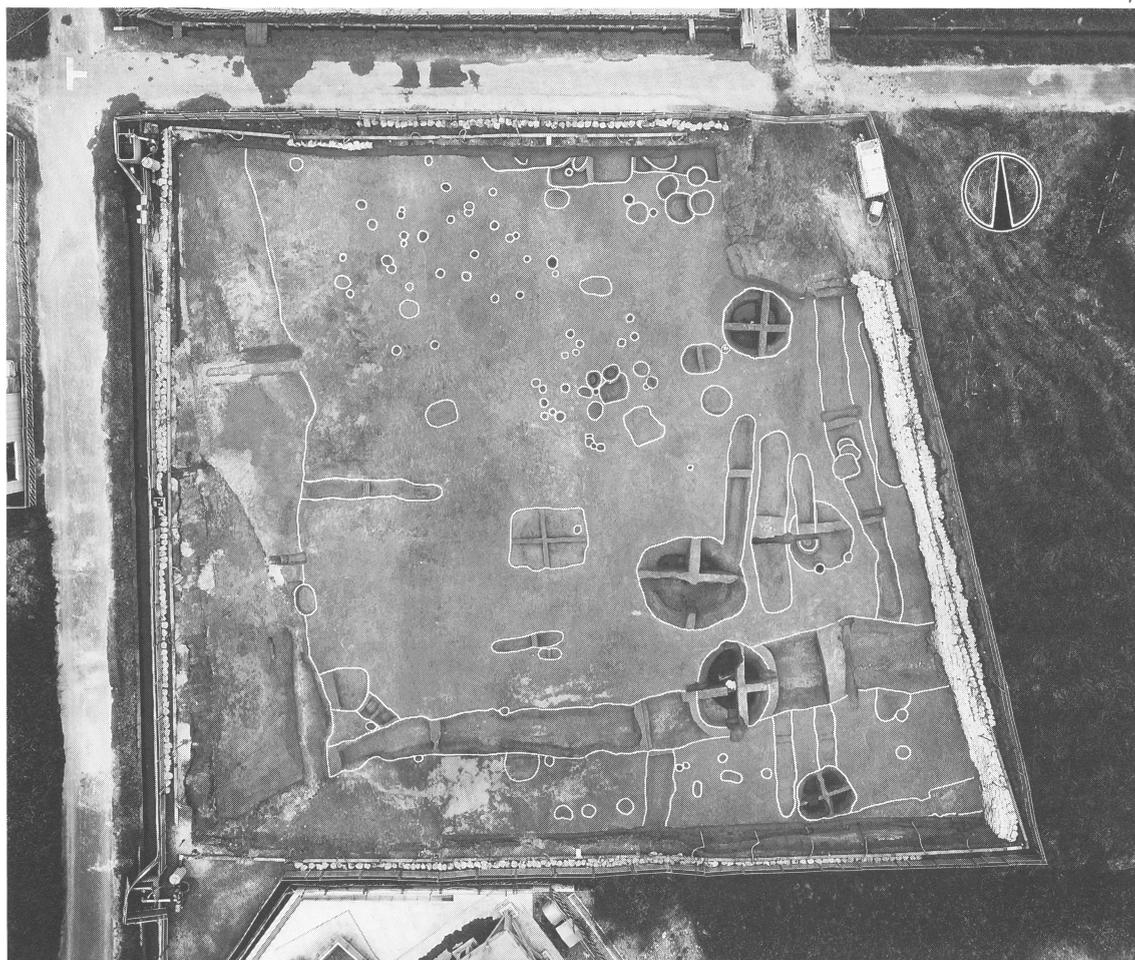


第7図 G区SB01・02・03出土遺物 (1/4)

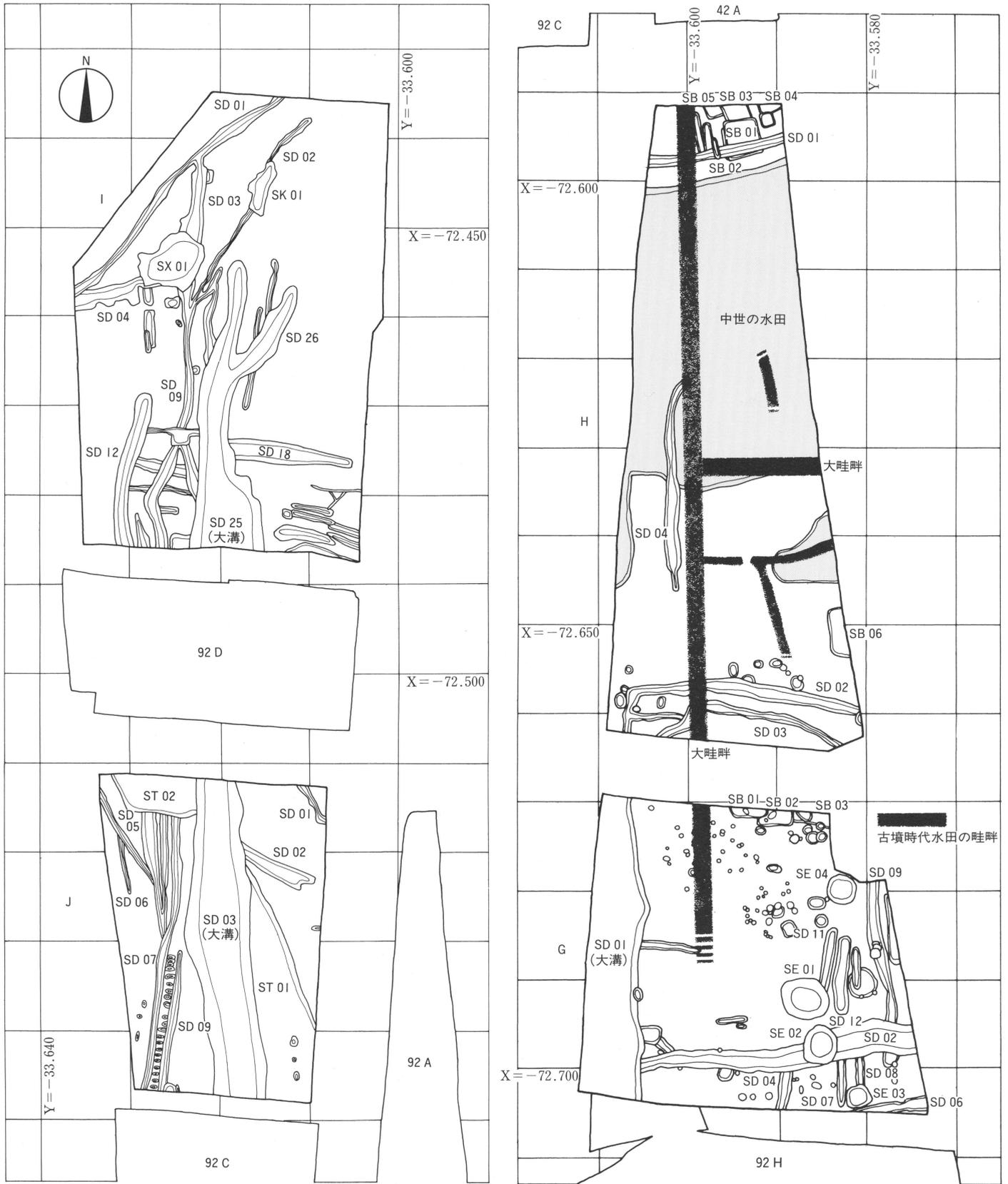


- | | |
|----------------|-----------------------|
| 1. 褐色シルト質粘土 | A. 中粒～粗粒砂（トラフ状斜交層理） |
| 2. 暗黄褐色粘土 | B. 細粒砂（平行葉理、トラフ状斜交層理） |
| 3. 暗オリーブ色シルト | C. 細粒砂（トラフ状斜交層理） |
| 4. 灰色極細粒砂 | D. シルトと細粒砂の互層からなるブロック |
| 5. 灰色シルト | E. 液状化跡 |
| 6. 黄灰色極細粒砂 | |
| 7. 黄褐色シルト | |
| 8. 暗黄色シルト | |
| 9. 灰黄褐色粘土 | |
| 10. 暗黄褐色粘土質シルト | |

第8図 I区S D03断面図



G区全景



第10図 G H区遺構図 (1/600)

自然科学的分析 田所遺跡A b区、B区において、砂層の液状化およびそれに伴う流動化跡が確認された。

A b区の西半分には、古墳時代の遺物包含層を切る河川堆積物がみられたが、この堆積物中に砂層の液状化跡がみられ、極細粒砂とシルトからなる平行葉理が乱されたコンボルト葉理 (Convolute Laminations) と、遺物包含層である黒色の中粒砂質腐植質土が砂層中に取り込まれた粘土の集合片 (Mud clast aggregates) が確認された。コンボルト葉理は、黒色の中粒砂質腐植質土の境界面に沿って東西の幅約3～4m、南北約15mにわたって発達しているが、境界面より離れる (西側へ向かう) と変形構造はみられない。泥質堆積物の集合片は、砂層内部の堆積構造とはほとんど無関係に全く不規則な形で含まれている。集合片は平均数cm程度の角礫状を呈し、淘汰は悪く配列に規則性は認められない。B区では、遺物包含層である黒色の中粒砂質腐植質土を切る砂脈が多数確認された。これは地震により間隙水圧の高くなった砂が構造的に弱い部分をめがけて貫入したものである。また、S D79では遺構を埋積する層厚約25cmのシルト中にコンボルト葉理がみられた。このコンボルト葉理や泥質堆積物の集合片という現象は、共に地震などで繰り返し応力を受けた堆積物が粒子間応力 (有効応力) を失って浮遊・流動状態になり形成されるものである。田所遺跡でみられるコンボルト葉理の特徴には次のようなものがある。

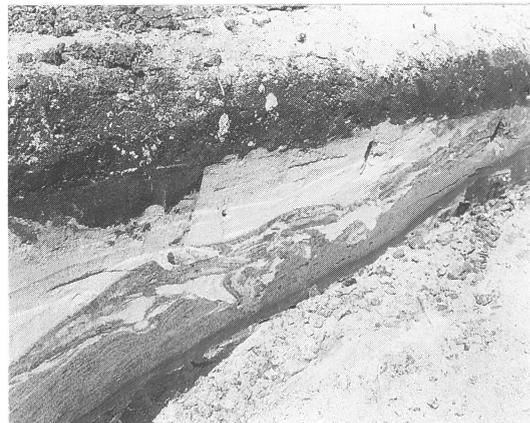
- ①砂層全体または単層上部に発達する。
- ②褶曲はなめらかで小断層はみられないことが多い。
- ③褶曲は砂層の下部より上部で著しい。
- ④平行葉理や斜交葉理の変形でその存在がわかる。

田所遺跡では砂層の変形構造が顕著である。これは、田所地域が木曾川に近く地下水面も高いと想定され、砂層内の水は少なからず飽和状態にあったと考えられるからである。飽和した砂の液状化現象が地震などにより普遍的に生じることは、Seed & Lee (1966) などにより報告されており、本地域の現象も地震により生じたことは確実である。

(鬼頭 剛)



A区液状化跡平面 (南から)



A区液状化跡断面 (南から)

まとめ 今年度の調査結果を要約すると以下のようになる。

- A～D区**
- 1 弥生時代中期（I期）から古墳時代前期（II期）そして中世（V期）にまたがる複合遺跡であるが、遺物・遺構の多い古墳時代前期が中心時期である。
 - 2 本調査区は、犬山扇状地と沖積地とが交錯する扇端部上に立地している。検出した遺構から判断すると、集落等の遺跡の中心域はより東の高燥地に展開していると思われる。
 - 3 検出遺構で注目されるSD10は、等高線に沿うように走り集落中心域とを区画するように配置されている。
 - 4 SD10とその北西部で確認された自然流路に挟まれた地域から多くの土坑群が検出された。土坑は規模（径及び深さ）の違いにより径250cm以上の大型土坑群と径200cm以下の中型土坑群の二群に分けられる。前者はA区中央部に集中（列をなす）傾向が認められるのに対して、後者は前者を取り囲むように南側に展開している。機能の違いを窺わせる。
 - 5 遺構・遺物共に最も多いのはII-a期であるが、これらが埋没した後、各調査区で規則性（規模、配列等）のある小溝群が検出されている。この段階がII-b期である。こうした遺構の大きな違いは、遺跡における大きな変動に起因したと考えられる。
 - 6 これまでは、本調査区を従来通り「墳墓堂」を中心とした田所遺跡に包括してきたが調査の結果から別個の遺跡であることが明らかになった。今後は田所遺跡から切り放し北道手遺跡の名称を用いて報告することにする。
 - 7 従来周辺地域で確認されていた地震痕は濃尾地震による噴砂のみであったが、本調査区のA・B区において新たにコンボルト葉理が確認された。（高橋信明）
- E～K区**
- 8 H区の北側に位置する92A区の調査で検出された古墳時代の水田遺構の区画は比較的小区画であり、矩形を基本としつつも不定形なものである。今年度の調査では南北方向と東西方向にほぼ直線的に走りH区で直交する2本の大畦畔を軸として、この畦畔による区画を矩形に分割する小畦畔からなる水田遺構が確認された。大畦畔は地形的な制約がないことから今年度の調査区外に延びることが予想され、大畦畔のあり方や包含層の広がりから広範囲にわたる計画的なものと考えられる。周辺の調査によってこの時期の水田のあり方を検討する必要がある。
 - 9 中世については昨年度の調査で一辺400mの方形に巡る大形の溝が検出され、今年度の調査ではこの溝に囲まれた集落の一部が確認された。G区に集中して検出されたこの時期の遺構がこれにあたるが、G区と同様にこの大溝に近接した位置の北隣のH区からは集落に係する遺構は南端部以外は検出されていない。G区の位置は、溝の方形の区画の中で南西のコーナーにあたり、集落域において特殊な部分にあたるためと考えられる。また、先年度の調査で検出された墳墓堂の区域の南西部にあっているE区の調査により、南端を画する溝や特殊な墓域を画する方形区画溝などが検出され、その様相が明らかになった。中世集落の構成と墳墓堂との関連を明らかにすることが今後の課題となるものと考えられる。（酒井俊彦）